

武蔵野日曜集会 年頭集会

われらのありかた

—— ロマ書第12章 ——

1965年1月3日

小池辰雄

壮大な気宇 キリスト者の在り方 神の本願の力 献身が本当の礼拝 本当の中道 霊知・霊情・霊意 御霊のパプテスマ 次元的矛盾構造 無即無限 有機体的な全体 十字架の愛 御霊の世界 この火燃えたらんには 驚くべき広大無辺な御霊 本当の天的な道理 キリストに賜りたる砕けの魂にこそ 和を以って貴しとなし 愛は一切に勝つ

【ロマ12・1〜21】

1 されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む、己が身を神の喜びたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。2 又この世に倣うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁え知らんために心を更えて新たせよ。

3 われ与えられし恩恵によりて、汝等おのおのに告ぐ、思うべき所を越えて自己を高しとすな。神のおのおのに分ち給いし信仰の量にしたがい慎みて思うべし。4 人は一つ体におおくの肢あれども、凡ての肢その運用を同じうせぬ如く、5 我らも多くあれど、キリストに在りて一つ体にして各人たがい肢たるなり。6 われらが有てる賜物はおのおの与えられし恩恵によりて異なる故に、或は預言あらば信仰の量にしたがいて預言をなし、7 或は務あらば務をなし、或は教をなす者は教をなし、8 或は勧めをなす者は勧めをなし、施す者はおしみなく施し、治むる者は心を尽して治め、憐憫をなす者は喜びて憐憫をなすべし。9 愛には虚偽あらざれ、悪はにくみ、善はしたしみ、10 兄弟の愛をもて互に愛しみ、礼儀をもて相譲り、11 勤めて怠らず、心を熱くし、主につかえ、12 望みて喜び、患難にたえ、祈を恒にし、13 聖徒の欠乏を賑し、旅人を懇ろに待せ。14 汝らを責むる者を祝し、これを祝して詛うな。15 喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ。16 相互に心を同じうし、高ぶりたる思をなさず、反つて卑きに附け。なんじら己を聴しと為な。17 悪をもて悪に報いず、凡ての人のまえに善からんことを図り、18 汝らの為し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。19 愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せま



つれ。録して『主いい給う、復讐するは我にあり我これを報いん』とあり。
 20『もし汝の仇^{あだ}飢えなば之に食わせ、渴かば之に飲ませよ、なんじ斯^{かく}するは熱き火を彼の頭^{こゝろ}に積むなり』²¹悪に勝たるることなく、善をもて悪に勝て。

【ロマ12】（口語訳）

1 兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。²あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨^{みむね}であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。

3 わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである。⁴なぜなら、一つのからだにたくさん^{した}の肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、⁵わたししたちも数は多いが、キリストにあつて一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである。⁶このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なつた賜物^{たまもの}を持つているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、⁷奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、⁸勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。⁹愛には偽りがあつてはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、¹⁰兄弟の愛をもつて互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。¹¹熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、¹²望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。¹³貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。¹⁴あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろつてはならない。¹⁵喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。¹⁶互に思うことをひとつにし、高ぶつた思いをいだかず、かえつて低い者たちと交わるがよい。自分が知者だと思いがつてはならない。¹⁷だれに対しても悪をもつて悪に報いず、すべての人に対して善を凶りなさい。¹⁸あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。¹⁹愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである。²⁰むしろ、「もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるの



である」。²¹悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。

● 壮大な気宇

集会を始めるにあたっての所見を述べたいと思います。キリスト者としての在り方、また、われらの在り方、また、一番深い広い意味においては、人間の在り方、そういうことをじっくりと考えたい。聖書の中でこのことに関しては、一番適切な章はロマ書12章であると思われまます。多分これは一、二回、既に学んだところではありますが、何回学び返しても新たなところですよ。

私は元日にいろいろな新聞を買ってくる。普段は朝日と毎日だけです。六つ、七つの新聞を買いに行つて、そして、大体、社説的などところを見るわけです。やはり、元日の新聞というものは非常に大事なものです。私は、今度これにぶつかつて、一番素晴らしいと思つたのは読売新聞です。読売新聞の一番先に、「今こそ人間の尊重」という題で、鈴木大拙とほか二人の長い対談が載っています。また、その中に、世界展望についての所見も書いてあります。

私たちは時々、視野を大きくして、キリスト者というものは決してただキリスト教の世界の何か仲間であるような、そんなのではなくて、本当に人類のまた国家の一員であるという、また世界的に見て、神の終末の国に向かつての偉大な歴史に参与しているものだという――この前も、「広大な福音」と題してお話しましたが――我々の視野を大きくまた気宇を壮大にして、クリスチャンはもつとあるべきだと思ひます。

その点で、内村先生は確かに大きな大きさを持つていたかたでありまして、さすがに内村鑑三というものがこの現代日本において、もはや無視することのできない存在として考えられているということは、あの内村先生の大きさにあると思う。

どうか、私たちは、内村先生の流れを汲む者として――それぞれ私たちが日常、することは小さい範囲のことでありまして――世界的な、また神の歴史における一員であるということ。イエス・キリストは全世界に君臨したもう霊的王者であり、また神の歴史の中心に立ちてありたもうところの主でありますので、「ザ・キング・オブ・キングズ」(王達の王)という意味でもつとクリスチャンは大きな気宇を持たなくてはいかんということ。年頭において私は新しく思つたわけです。

私の先生の藤井先生もまた実にそういう意味において、内村先生に劣らない壮大な気宇を持つたかたでありました。今年は35周年にあたるので、先生の講演会をY・S君としたらと思つていますが、もしY・S君が私とやらなければ、私一人でもいたします。藤井先生の一番大事なことを語りたと思つております。



●キリスト者の在り方

そういう意味において、私たちのこの小さな細々としたことは乗り越えて行きたいと思えます。しかしまた、キリスト者というものの現実の在り方というものと、そういった壮大な気宇というものは相表裏するものである。現実の在り方がその大きさを持つということが決してただ浮いた大きさではなくて、本当に豊かなゆとりのある弾力性を持った在り方というものが、その大きさというものとあい相即するものである。

ある「一途」ということが、「純粹」とか「眞実」とかいうような角度の言葉が、ややもすると無教会で今までありまして、それがまた無教会のパリサイ的な情操をなしていく。その点ではやはり、内村先生というのは確かにこの第三期の方々よりもケタ違いの大きさを持つておられたということを思う。

そしてまた、使徒たちの中においてやはりその素晴らしい大きさを持つていたのは、何といっても、パウロです。パウロという人は実に何ともいえない大きさと、重厚な構造を持っている。これが本当にキリストを一番、全的に映しだしている。キリストは言葉では表すことのできない、大きなものそのものでありますけれども。

実に今は世界の歴史は、ここにも書いてありますが、壁にぶつかっている。いろいろな意味の壁にぶかっているわけですが、また、日本自身がそうであります。この壁を突破して、大きな世界をそこに展開する。そういう、突破した先の素晴らしい世界。狭き門を通るが、その先が何と広々とした私たちの現実であるかということは今、私たちはこの新年を迎えるにあたって、皆さんと本当に胸を開いて、大きな気持でもって進んで行きたいと、こう思っているわけです。

私がないだ、クリスマスで少し何か烈しいことを言ったらしいので、そのために若い方で躓かれた方があったようで、誠に私自身申し訳ないと思っておりますが、決してそういうことでないということ、後から私は一、二の方にお便りしたわけですけれども。

どうか、そういう私の気持で、今皆さんとこの集会に、おらかな豊かな気持で臨んでいるということを知っていただきたいと思う。

●神の本願の力

それでは、ローマ書の12章から読みながら行きます。

「されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧め、己が身を

神の喜ぶたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。

「そういうわけであるから」というのは、前の方を受けまして、徹底的に個人の信仰の消息を、信仰とはいかなることであるかを、ローマ書の8章までに徹底的にパウロは説いてきた。

何といっても、このローマ書というのは素晴らしい書簡で、ルターがああローマ書の註



解を書いて、宗教改革の烽火^{のろし}をあげたように。また、バルトが今世紀の始め頃に、ローマ書の註解を書いて新しい神学展開をしたように。内村鑑三先生の『ロマ書の研究』も、内村先生の書いた文字はやはり何と言つても一番大きな素晴らしいものであります。

そして、信仰の根本問題を徹底的に宣明、告白いたしましたして、そのあとで12章において、「そういうわけだから、今度は、我々の実存はいかにあるべきか」と、実存問題に――「ありかた」ですね。私が「実存」なんていう言葉を使うものだから、

「どうも、小池というやつは実存哲学に基づいて何かものを言っているようで困る」

なんていうことを仰る先生もいらつしやるようですが――「実存」と言いましても、実存哲学ではありませんから、決してお間違いにならないように。「ありかた」で結構です。

今日は、ひらがなでやさしく書いた。「われらのありかた」と。そういう在り方の問題です。この在り方が決して、ただ再び道徳を説いているのではない。

「当然、そのような在り方に展開するのだ」

と言つて勧めている。もはや、律法の世界を、パウロはまた新しく繰り返し返すのではない。

どうか、新約聖書にいろいろ倫理的なことが出ておりますけれども、それはいわゆる「倫理」とはちがう。「新しき律法」という言葉がありますけれども、「新しき律法」ということはもう全然、いわゆる律法ならざる律法であつて、勧めであつて、当然展開する力ある道であるということです。

この「されば」というのは非常に強い「されば」であるということを知解者も言っております。

われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧めむ、

「神の慈悲によつて勧めむ」という。自分の何か教えでも何でもなし。神さまの慈悲によつて。要するに、神さまの慈悲の力です。これが本願の力です。

「本願があるからお勧めしますよ。大丈夫、本願の力があるから、お勧めする」

と。人間はどうせお互いさま、五十歩百歩で、弱い者であり躓きやすい者ですから、「だから」と言つて、パウロはいつもあとからそういつた在り方の問題を懇ろに語るわけです。

● 献身が本当の礼拝

まず第一に言つたことは、やはり一番大事な中心を。パウロは言つたのであつて、

己が身を神の喜びたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。

と。新しい訳では、

あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげ

なさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。

と。「霊的な」と訳してもいいが、むしろ、原語はただ「霊の」であります。「霊の」と言いまして、この霊という字はいわゆる「プニューマ」という字ではない。「ロギケー」とい



う字で、論理、「ロゴス」という、まことに理にかなった、天の理にかなったという、天的な理にかなったところのもの。「ロゴス」は、昔は「道」と言ったから、「道」でもいい。「道理」ですね。本当の道理あるところの——我々の普通使っている言葉というものは、「元をたずねるとみな非常に深い言葉なんです。それが平常化してしまっている——「道理」というのは本当にいい言葉です。道にして理ことわりであるという。法則の世界です。それは本当に霊法の礼拝であるという。

「己が身を」というのは、「身」と言ったって、これは「存在」ということです。自分の全存在を、

「神の喜びたもう潔き活ける供物として献げよ」

と。これは正に「献身」ということ。献身的であれと。存在を献ささげる。献身せよ、献身が本当の礼拝であると。

いわゆる礼拝という言葉にふさわしいような——日曜礼拝ですね、いわゆる教会や——私はドイツへ行っても、ルター教会はまるでカトリックだか何だか分からないような形式的な礼拝ですよ。そこへいくと、無教会の方は、学校のちよつと講義みたいところがだいぶあつたですけれども。私たちは、この集会というものはどちらでもない。

また、いわゆる献身が、今度は山の中にこもってしまつて、祈り三昧や、あるいは隔世的な、世と隔たつてしまつたようなものは献身でも何でもない。神さまの喜びたもうことは、やはり、キリストがちまた巷でもつて本当にいろんな人を相手にして、これを救つたのがイエス・キリストの本当の「生ける供物として」の生活ですよ。お釈迦さんもそうです。そういう意味において、まことの敬虔けいけんというものはどうということかという、これはルターが、カトリックの敬虔に対して、

「福音的な敬虔はどういうところにあるか」

と云つて、

「日常生活の普通の職業に就いて、みなそれぞれの、手仕事でも何でもいい、何をやっていても、それで本当に神の栄光を、キリストの栄光を表しているのが本当の敬虔である」

と言つたのがルターなんです。そこにはつきりと、宗教改革の根本性格があるわけです。そこから、職業意識、本当の職業、天職というものは何であるかということが出てくる。

その点で、日本人はまだこれが非常に弱いものだから、何でもかんでも大学を出ることばかり考えている。とんでもない話です。みんなそれぞれの在り方でもって行けばよろしい。吉川英二なんていうのはいわゆる学歴なんかなくて、本当に自分の天職に生きた人です。

「私はもうこれでいくんだ」

といった青年が、もつと型破りな青年が出てきていいわけです。生涯の自分のやること、どんなに人にそれがつまらなく見えようとも、そこに本当に安んじて行くというのが本当



の霊の理の献げ物なんです。それが本当の天職なんです。

そういうことが自覚できないということが、何ととっても、福音を日本人が全体として受けとらないという根本的な間違いからきている。学校の制度そのものにそういった欠陥を既に来たしている。学校の制度そのものというものが、もつと万人のいろいろな人のいろいろな才能を満たすような学校制度というものができなくてはいかん。そして、くだらないこの入学難——もう幼稚園から始まっている——なんと無駄が多いか。無駄骨折りが、ロスが多いか。日本人はなんと無駄の、損失の多い生活をしているだろうかと正直、思います。これが本当の理に、合理性に乗ってないからです。

その点では何ととっても、ドイツ人はもの凄く合理性が強い。少し合理性が強すぎると思うくらい、合理性の強い国民でありますので、あのようになじつくりと築き上げていく。それはどこから来ているかというのと、やはり、宗教改革のこの根本精神から来ている。

だから、何ととっても、福音に対して、先入観を去って、新しい自覚をさせなくてはならない。私たちが、皆さん一人びとりがですよ、回りの人たちに、でつくわす人たちに、

「本当の福音はこういうものだ」

ということを折りにふれて証しする重大な責任を私たちは担っているわけです。

それがただこの理に、福音においては、この道理に力があるんです。この道理に力がなから、いくら道理が頭で分かっても、どうにもならない。そこにパウロがこの12章でも言っているもう一つの大事な面があるわけです。力がある。それが観念信仰ではダメだと。そこに本当の御霊の内住ということが大事です。

その御霊の内住と大きな道理というものが一つになって、そして、それが豊かなあるひとつの性格を持つためには、一体何がそこに必要であるか。そのことも書いてある。

「これ理の祭である」

と。本当の理の歩き方で、神さまへの奉仕の生活であると。

● 本当の中道

2 又この世に倣うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁え知らんために心を更えて新たせよ。

と。口語訳では、

2 あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であつて、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。

なかなかこの内容が重厚であります。この世と妥協してはならない。この世の、この世的なものの考え方、やり方というものは、この理の世界は違うということです。それが歪んだものに対するところの真の法則の世界から、妥協はするなと。



「妥協はするな」

ということとは、間違えては困る。

「私はこうだから」

と言つてすぐ切るような、そういうことではない。自分の法のり、理ことわりというものがちやとあるときには——キリストは、

「神さまは世を愛する」

とまで言つてらっしゃる——この世の中にありながら、決して妥協しないで、この世の中にその自分の法のりを本当に溶かして、その法の中に入れてしまう。その真の法の世界に入れてしまう。この世をむしろそういうように化する。ということは、今そこに住んでいるから、

「心を新たにしてい」

という。この「心」という字がやはり、「ヌース」という字で、これは「理」という字なんです。理性の理です。プラトンや何かの哲学の方にいくと、この理性の方です。この場合の「心」という字は、そういった「エピグノーシス」「超知」「靈知」をわかまえるような、そういった理性です。この場合の「ヌース」はそういう気持を持っています。「ガイスティツヒ」な、靈的な「フェアヌフト」、靈的な「理性」です。

私たちはみんな、ものを判断するのにやはり、知性というものがある。現代人は何といったつて、知的な人間です。お互いさま。この知性かいゆる生まれつきのただ知性でなくて、そこにあるひとつの透き通った智慧、聖書でいうところの——知識ではなくて、この靈知、ならいいですけども——本当の智慧。

「神を畏るるは智慧の初めなり」

と言うでしょ。あの意味における智慧というもの、そういう知です。「知る」という。

「神さまは私たちが知り給う」

という。

「我々はいかにしてキリストを知るか」

とパウロは言った。コリント前書13章にもこの「知る」という字がたくさん出てきます。そういった意味における理性、知性がこの場合の「ヌース」「心」という字です。

新しい、そういった本当の理をしつかりとわかまえるところの、そういった理性、知性というもの。そういう意味において日本人はもつと理性的でなくてはいかん。私たち自身もそうでなくてはいかんと思います。

とにかく、人間の働きの知情意というものがある。それが人間によつて、それはいろいろ性格の上でどちらかに強いという人がありますけれども、どれからも欠けては絶対にダメです。欠けてはダメです。知情意というものはひとつの、その人においてある特性は出てきまして、必ずバランスがとれてなくてはいかん。バランスがとれていなかつたらば、必ずおかしなことになる。



そういう意味において、いつも本当の「中」ということ——この「中」という字は、真ん中を線が貫いてコマみたいに関転しているけれども、これは倒れない——そういう本当の正しい中道、というものを持つていなくてはいかん。

お釈迦さんにいろんな弟子がいて、しかし結局、本当の中道を行かなくはいかんということをお釈迦さんが言っているところがある。

知情意というものは、生まれつきの性格でいろいろです。それは仕方がない。そういうように造られているんだから。けれども、神さまは決してどれかを欠いたようなものをしてはなさらない。それがひとつのバランスをその人において持つ。意志的な人も必ずそこに情と知がなくてはいいかん。情的な人もそこに意と知がなくてはいいかん。知的な人もそこに情と意がなくてはいいかん。それぞれにおいて、

「ああ、あの人はこうであるが、しかし、本当にバランスがとれているな」ということ。アンバランスはダメですよ。

● 霊知・霊情・霊意

知というものを、「心を新たにして」というのは、

「キリストの御霊によって本当に新しい天的なヌース、知性、理性というものを得よ」

と。そして、それが新たに「造りかえられる」というのは、「メタモルフォー」という字で、変貌させる。「キリストの変貌」という。「貌」という字は姿という字ですけれども、この場合、これは内的な姿です。そして、「作りかえられる」というのは、

「内的な変貌をきたされる」

ということ。外側は何も変わっていないようですけども、内側はちゃんと変貌している。内側が変貌するためには、神の霊性というものがあると、それが霊的な知となり、霊的な情となり、霊的な意志となるわけです。

そういう意味においてですよ。よく、「霊的、霊的」と言うけれども、何か妙にきちがいじみたような霊的は困るよ。これは、その霊的の中にちゃんとこういうものが備わっている。こういうものを本当に活かす。我々に与えられたものは、

「神さまの造った一切のものは善からざるものなし」

なんです。それを本当に善きにするためには、中心に「プニューマ」(霊)がある。霊知、霊情、霊意、というわけだ。そんな言葉はないけれども、そういうようなわけでありませう。

それが、特に「わきまえる」という意味において、パウロはこの場合に「知」と言う。パウロというのは非常にやはり知性的な人ですから、随分、知のことが出てくる。しかし、その知が本当にキリストの霊によって新しくされた。また、彼の義が本当に、

「わが生まれつきの義は塵芥ちりあくたの如くして」



というが、キリストの義とし、キリストの知とし、キリストの情となり、キリストの意志となる。

イエス・キリストがそういうことです。神さまの意志となり、神さまの情となる。この神さまの情というのは愛、アガペーのことです。

「汝の御意を成させたまえ」

「汝の情をわが情となさせたまえ」

と。即ち、神のアガペー的愛が、汝の知が、本当の「賢し」だ。「蛇の如く賢く」という。今年には蛇の年だが、

「蛇のごとく賢く、鶴のごとく素直なれ」

と。

『蛇のごとく賢く』というから、ひとつ蛇のごとくずる賢くなつてやろう」

なんて、それは困るよ。そんな意味じゃないですから。蛇はずる賢いか何かは知りませんが、賢くという、そういう知です。天的な知です。

「何が神の御旨であるか」

と。さきほども、

「神さまの喜びたもう潔き献げ物」

とあった。「聖き」とは、神の意志、神の義、神の愛を受けとることがみんな「聖き」ということ。「聖」という字を、何か冷たいように感じてはいかん。何か冷たいような、人を審くような聖なんていうものは、福音的な聖ではない。福音的な聖というのは、そういうこと。本当に、今日の太陽の光みたいなのです。それが「神の喜びたもう」「神の御旨に」と言つて、いつも神中心で、そして、一番先にパウロは、

「神のあわれみによって汝らに勧める」

と言つたわけです。

●御霊のバプテスマ

3 われ与えられし恩恵によりて、汝等おのおのに告ぐ、思ふべき所を越えて自己を高しとすな。神のおおのに分かち給ひし信仰の量にしたがい慎みて思ふべし。

3 わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う。思ふべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思ふべきである。

なんとパウロという人は思い遣りの深い懇ろな人であるかということが、このような言葉でも分かる。あの驚くべき烈しさを一面においては持っている。とにかく、ダマスコ途上の回心なんてのはやはり尋常なことではない。そのパウロが、しかし本当に、なんとまあ、



弱き弱者を深く思い遣り、

「^{いた}傷める^{あし}韋を折ることなく、ほの暗き^{ともしび}灯火を消すことなし」

という面を彼が持つていたか。また、イエス・キリストが非常に烈しいかたで一面ありますけれども、しかし、また一面これより柔らかさを持ったかたはない。

要するに、大自然のごとくなる。さつきから、「大いさ」と申しましたが。私たち人間というものはみな――それは器というものはありますよね、けれども――質における大いさというものがある。キリストの御霊が来てくださると、そういう質的な大いさとか、質的な弾力性とか、質的な多様性というものがみんな入ってくる。それは不思議ですよ。

私が20歳代にそういうことを思わないことはなかった。けれども、それがどうもいかん。それはどうしても思うだけで、その気持は本当に現実とならない。その現実となるのは、どうしても御霊のバプテスマの世界なんです。私はとにかく60歳になって、そんなことを言ってますけれども。

しかし、どうか皆さん、御霊の世界はそう一朝一夕に来ないかもしれない。あるいは来るかもしれない。けれども、私はそんな現象を言っているのではない。神さまがそれぞれの器をそれぞれの路をもつて、それぞれの時期の長短をもつて、展開なさいますから、決してあせることはない。人まねはいらん。

ある人から手紙がきた。この集会にほとんど来てないかたであります。ある集会の方につつと行っていたところが、どうもそこは霊的な傲慢さがあつて困るという。

「私は昔、小池先生が、

聖書でいえば、

「パウロはパウロ、ヨハネはヨハネ、ペテロはペテロ、アポロはアポロだ。それら

は何でもない。ただキリストだけだ」

と。そういつた意味のことをまた別な言葉で私が言った、

『それぞれでいいんだ、決して人まねはするな』というようなことを言われたけれども、

今、本当にそれが分かりました。それで自分は自分の路を行くことにしました」

と言つてきました。そうなんです。ここでパウロが12章で非常に戒めているのは霊的傲慢、ということなんです。思い上がりはいかんと。

●次元的矛盾構造

「むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがつて」

と。パウロはおもしろいことを言う、

「各自の信仰の量りにしたがつて」

と。もちろん、この信仰の世界はキリストが、

「汝の信仰、汝を救えり」



と言われた。信仰は質的にみな一つであります、究極のところは。けれども、そこに至るには、その人がある時本当に究極にいくこともあるし、また戻ってしまうこともあるし、人によって――人間というものはとても分析しきれものではない、人間の在り方というもの。それはだんだん歳をとると分かりますけれども、人間を観念的に割り切つてはいかん――そういういろいろその段階が正直ある。私自身も段階があつて、今はそういう段階で、まだまだ先がいくらでも段階がある。だから、それをパウロが「信仰の量り」と言つたんです。

「信仰の諸段階に従つて」ということ。

「では、自分は今どのへんの段階にいるか」

と、そんなことは心配することはない。どんな段階にいたつて、それは直ぐ絶頂に通じてもいるんです、ある意味において。ですから、そんな段階かと思つたら、とんでもない素晴らしいところにいるということも現にある。

だから、

「それは絶対無条件だ」

と申し上げているのはそのことです。そういう、あるひとつの、次元的に矛盾構造をなしていると言いますかね、人間というものは。その次元的矛盾構造を持つている。相対的にはこんな段階にいるが、また、相対的には素晴らしい段階にいると思つたが、どっこいダメになつてみたり。そういうことで、結局、人間の側はそう大して問題でない。

けれども、とにかく、パウロがここで言っているように、事実いろいろな段階がありますから。

「それに従つて、慎み深く思ふべきである」

と言う。

●無即無限

4 人は一つ体からだにおおくの肢えだあれども、凡ての肢すべその運用はたらきを同じうせぬ如く、
5 我らも多くあれど、キリストに在りて一つ体にして各人おのおのたがいに肢えだたるなり。

4 なぜなら、一つのからだにたくさんしたいの肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、
5 わたしたちも数は多いが、キリストにあつて一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである。

パウロはコリント前書12章、ローマ章7章で同じようなことを言っているでしょ。

「目が耳に向かつて、お前はなぜ目とならぬかと言つたら、全身が目だつたらどうするか」



なんて。人間の体がいかに有機体的なものであるか。各部所がそれぞれ離してしまつたらダメです。いくら目玉がいいといったつて、目玉をくり抜いてしまつて、さあご覧なさいなんて言つたつて困るよ。どれだつてみんなこれは連なつて^{つら}いる。絶対に連なつて^{つら}いる。相連なつて^{つら}いる。

私たちクリスチャンが、また人間がみんな相連なつて^{つら}いる。私はただ「クリスチャン」なんて本当は言いたくない。もうすべての人と連なつて^{つら}いる。すべての人は、人類同胞という。すべての人と連なつて^{つら}いる。レットテルでもつて人を品定めなんかしてはいかん。

みんな連なつて^{つら}おります。本当にすべての人が連なつて^{つら}、神さまの大きな大家族である。大きな体である。そこを深く考えてごらん。考えると言つたつて、頭ではないですよ。意識してごらん。

そういうことが深く意識できるためには、もうそこは聖霊の愛です。そういうことに来たら、もうカトリックも、何々教会も、仏教徒も、回教徒もありませんよ。創価学会だつて何だつていいですよ。みんな人間ですよ。ただ、

「私たちがばかりが人間でござる」

というような顔をするから、それはいけませんと言う。もし、創価学会が

「これだけが宗教だ」

なんて思つたら、それはいけません。聖書を破つたりなんかしたら、とんでもない。

もう最後の立場というのは、一番どん底の、一切を包括する、一切を包摂するところの、そういう突き抜けた大きさというものは一番強い。そこが、申し上げているとおり、本当の無的実存の世界なんです。「無」なんです。キリストは、お釈迦さんは、みんなその無の世界におられた。無即無限の、自己の本当に無い、

「一切を衆生を済度する、万人を救済する」

という、これは本当に自分が「霊の祭」とされて^{つら}いるような時に、そういう角度になつてきますと、本当の「聖」が一切を清めていく。清めて豊かなものにする。豊かな清さです。

そういうところに入ると、その枝々の特色をよく認めて、その段階をよく見て、

「ギリシア人にはギリシア人のごとく、^{えびすびと}夷人には夷人のごとく」

と言つて、パウロがこれに接して、何とかしてそれを神の国に入れてしまおうという広さです。

皆さんは、そういう豊かな、何ともいえない人になつて^{つら}ください。私たちの「われらのありかた」というものは、

「武蔵野幕屋というのは何と小さな群だけれども、驚くべき広さと広大の気持をみんな持つているな」

という人になつて^{つら}いただきたい。そして、それぞれに賜りたる特色は、大いにそれぞれに



して磨きあげてください。

まあ、私がコンダクター（指揮者）だとすると、あなた方はいろんな楽器を持った楽人である。それぞれの響きを持っている。練習のときに、その響きが一つでも調子が狂うと、

「ちよつと待てくれ」

てなわけで、コンダクターはやるわけですよ。そしてこれが素晴らしいハーモニーとなつていくわけです。太鼓みたいに、ドーンとももの凄い響きを発するやつがいるかと思えば、小川のせせらぎのごとくサラサラサラといくのもある。あれで第六シンフォニーは素晴らしい。始めから終りまで、ドンドンやつてごらん。日蓮宗とまちがえられるよ（笑）。

そういうわけでありますので、どうか、皆さん、それぞれの善さというものを、人まねはしないで、お互いに尊重して大きなハーモニーをなしていく。人体がそのごとく、大交響樂がそのごとく。ベートーヴェンの第九シンフォニーもこの集会の交響樂にはかなわんという、在り方そのものをもってするところの、皆さんが交響樂を、第十シンフォニーをこの集会が、

「言わず語らず、その響き全地にあまねし」

という響きを発していただきたいと、こういうわけであります。

●有機体的な全体

だから、パウロはそういうことを言つて、

6このように、わたしたちは与えられた恵みによつて、それぞれ異なつた賜物^{たまもの}を持つているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、

集会に何かいろんな仕事をして奉仕する。

7奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、

「教える」ということは、いろいろ教えるということ、**「宣教」「ケリユグマ」と「教える」「リラケー」という言葉は違う。「宣べ伝える」ということは、福音を、喜びの音信を伝える**ということ。「教える」というのは、いろいろな実存面においていろいろ論^{さし}すというのが、この「教える」です。

「福音を宣べ伝える」

ということとはむしろ、

「喜びを告白する」

と私が言うそのような角度です。「宣べ伝える」はむしろ告白する方です。「教える」は即ち論す方です。

8勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、

いろいろな事業をして――事業でなくてもいいけれども――とにかく「大いに福音のために使つてください」という者は、大いに惜しみなく寄附をし、



指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。

みなそれぞれ、まだパウロがここにあげないいろんな働きがあるでしょう。それぞれの働きを大いにやってもらいたい。そして、全体がひとつの力ある豊かな献げものとして、すべての営みは神さまに対する献げであります。どんな営みであつても。それが有機体的な健全とした献げとしていこうじゃないかと。

9 愛には偽りがあつてはならない。

愛というものは、パウロはローマ書13章のすぐあとの方で大事なことを言っています。

「8 汝等たがいに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。」

一切の律法の全きはただ愛の一言に尽きるといふ。

9 それ『姦淫する勿れ、殺す勿れ、盗む勿れ、貪る勿れ』と云えるこの他に
なお誠命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』という言の中にみな籠るなり。

10 愛は隣を害わず、この故に愛は律法の完全なり。(ロマ13・8〜10)

「完全」というのは「プレローマ」「充満」ということです。愛は律法の充満である。律法の満ち満ちたところのものは要するに、

「愛が一切を覆つてしまふ」

ということ。あるいは、

「愛は徳を全うする帯なり」(コロサイ3・14)

と言つてみたり、また、

「愛は徳を建つ」(コリント前8・1)

という言葉もある。

● 十字架の愛

そういうような営みをもって、一人びとりがいろいろな各種各様のものをもって、この集会というものを成している。団体というものを成している。また、その中にグループがある。レバノン会、オリーブ会とか、ガリラヤ会、ヨルダン会、サフラン会とか。どうか、そういう意味で大いに――それは党派根性を言うのではない――いい意味におけるグループ意識をもって、お互いに担い合つてください。

今、O君が病気になつています。どうか、そのグループの人は誰か代表者を送つて大いに慰めとか何かとか、具体的に――福音の世界は具体ですからね、ただ思っているだけではしようがない――具体的に行為的にやつてください。信・行なんだから。

「善き行為をしようかと考える前に既に本当の信は為している」

とルターが言っている。そのような具合に私たちは、どうか――私は一つ一つ、一人びとりに向かつてそれだけのことができせんから――あなた方は大いにやつていただきたい。



もちろん、私は行ける時には参りますけれども。しかし、皆さんが行くことが、それが即ちキリストが行き給うことである。

「小なき者に為したるは即ち我に為したるなり」

です。結局、実践する人は本当に神の力に与あずかっている。実践しながら与あずかっている。必ず与あずかっているんです。また、Oさんも動けないでいるから、あれはレバノン会の方々が行っていただきたい。まあ、それやこれやとその他のグループにもいろいろあると思えますから、

「どうなさいましたか？」

というわけで、もつと行動的でありたいと思います。これが私たちの在り方というわけです。それは律法ではない。さつきから申し上げているように、神の慈悲の力によって、愛の力によって進める。私たちの中に一番中心になっているものは、言うまでもなく、さつきから申し上げている、この聖霊です。

さきほど言いましたこの愛はキリストの愛に、本当にあの霊愛にふれて、そこで本当に十字架の問題がいつもその根底にくるわけです。

「我れキリストと共に十字架されたり」

ということは、されたことによって十字架を負う人となるわけです。「負う人」ということは、十字架を負うだけの力を持つ人です。それはどこにその力があるか。言うまでもなく、復活のキリストの力、御霊のキリストの力です。御霊のキリストの力のその質は何か。言うまでもなく、愛である。こういうことです。

御霊は、十字架の愛を持っている。復活の力を持っている。そういうものが自分の中で本当に生きています。生きていますためには、パウロはそこで何を言っているかというところ、もう少しあとの方向になりますけれども、もう少し読んでいきます。

9 愛には偽りがあつてはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、¹⁰ 兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。¹¹ 熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、¹² 望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。

そここのところですね。もうそれでもって内容はみんな言い尽くしているように言っている。

「霊に燃え」

というのは――これは正に「 Pneuma 」 「 霊 」 という字です――霊に燃えるためには常に祈っていないければダメです。祈りと霊は離すわけにはいかん。祈りの霊というけれども、これはまたどこまでも、

「キリストの懐に入る」

ということですよ。



「汝はわが愛なり」

という。キリストは、

「私はお前を愛する」

と言う。また、同じ

「汝はわが愛なり」

と、今度はこつち側から言う。

「あなたは私の愛の主体です」

と。とにかく、こうやって生かされているんですからね。生かされているということは、キリストの、神さまの愛によらないで生かされているわけではないんです、我々が生かされているということ。愛と言っても、慈悲と言ったって構わん。恵みと言ったっていいです。徹底的に十字架において私たちは過去も現在も未来も赦されつつ行く。赦されている。赦されて、

「本当にお前を大いに使うぞ。大にお前を使って、お前を通してやるぞ」と。そして、それは祈りの世界でもってそれを受けとる。

●御霊の世界

昔の無教会の人から年賀状が来た。わりあい近いところに住んでいるから、

「どうか、いつでも遊びにきてください。私は無教会の嫌われ者で、あなたも煙たく思っているかもしれないけれども。そんなことはない。とにかく、来たらわかるから」

なんて、私の年賀状は勝手なことを書くものだから。それはキリストに愛されて、

「主に愛されるけども、無教会に嫌われる者より」

なんて、その人に書いた。

「また、しよがないことを言うやつだ」

なんて思われるかも知れないけれども。そういう「主に愛されるけども」という、

「主に愛されている」

ということ。皆さん、

「私は主に愛されているでしょうか？」

なんて思っていたらダメですよ。それは本当に十字架を受けとっていないければ、そういうことになりますよ。

「わが十字架によって、私はすっかりお前をもう問題なき者にしてしまったよ」

と。これを誰が他の人ができますか、人間は他の人ができますか。キリストは無条件に私たちを、無条件に過去がどうであろうと何であろう、現在がどうであろうと、将来がどうなりそうであろうと、



「そんなことは心配はいらん」
と言われる。

「でも、将来、私はどうでしょうか、わかりません」
なんて、何を心配しているか。何も心配はいらん。

キリストの十字架の恩寵は完全に贖い切っている。贖い切っているところから、ことは始まる。イエス・キリストの十字架は私たちを贖い切っているんだから、もはや一点の――この部屋にはゴミがひとつは浮いているかもしれないけれども――そこにはゴミは一つも浮いてない。キリストの贖いは、罪の一つも浮いてない。そのように、この私たちを贖い切ってしまったのに、その愛の他にいかなる愛があるか。

ずうっともう全身が聖められてしまっている。自分はどうかだっている。いくら決心したってダメですよ、人間の決心なんてものは。

「年が改まったから、ひとつ大いに決心して…」

なんてね。それはいいですよ、わるくはない。人間らしきで、わるくはないけれども。

「年が改まったって大したことはないや」

なんて、そんなたかをくくつたら、それはいかん。大いに決心していいですが、しかし、決心の奥に――決心は、私なんかすぐ三日坊主だ。すぐまたダメになったりするけれども――キリストの十字架は、そのいろいろ波立つところの奥に、泰然とはつきりとした線を引いて私たちに、

「贖い切つたぞ。だから、もう心配いらん。いろいろな前後は考える必要はない」

といわれる。壁は突破されている。今度の『桑の木によぢのぼる』（贖愛新書第2号、1964年刊）の後の方の「天路」と「終末の実存」のところに徹底的に書いてあります。あれをじっくり読んでいただきたい。

徹底的にもう贖い切ってしまったているんですから。その愛に、本当に自分が祈りの世界でその愛に触れたときに、もうキリストの御霊の世界に入らざるを得ない。御霊の体験の仕方は、私は知らんですよ。皆さん、どうでもいいです、体験の仕方は。

「こういう体験の仕方をしました」

「ああいう体験の仕方をしました」

「私はまだそういう体験をしたことがありませんから」
なんて言って心配する。私はそんなことを言っているのではない。

「本当に十字架を受けとつていれば、それでもう御霊の世界に来ざるを得ない。それがどう自覚されようが自覚されなからうが、どのような体験現象が起きようが起きなからうが、いいよ、そんなことを問題にするな」

と申すわけです。若い方々が、どうか、そういうことでお躓きにならないように。



●この火燃えたらんには

それで、深くその祈りの世界になる。そうしたら、霊が自然に静かに深く燃えている。浅間山は爆発しなくても、静かに深くその奥で、この火山は燃えています。キリストの生命が、また源泉滾々こんこんと昼夜をわかつたず、これが泉しております。それをキリストはヨハネ伝4章で「泉」とも言われた。また、

「この火燃えたらんには何をか要せん」

と、ルカ伝12章で「火」と言っておられる。

「我れ火を投ぜんために来たれり」

と言っておられる。その「火」とは、また「水」とかいうのはこの「霊」です。これは十字架を受けるところには、それぞれ皆さんに絶対に来てはいるんです。そこを祈りの世界で、

「ははあ、これは本当だな」

ということがだんだん自分でもって身についてくる。そういう祈りの境地といいますか、体験といいますか——主観ではないけれども、私は無教会時代になかったとは言わないけれども、どうもそこがまだ本来に来ていなかったが——ある時からそうだった。それから先は楽になった。新約聖書になんと「御霊」ということがかくも書かれているか、ということにそのとき初めて気がついた。

でありますので、親しい方々があい寄って、そのグループの人やなにかで——なにもグループの垣根をつくるわけではないけれども。私はどのグループにも属しますが。なにもグループに限りませんよ——大いに深く祈る。あるいは独りで深く祈る。こういう集会をしても、本当に親しい気心のわかったあいだなら、それはもの凄く爆発的な祈りをしようとするいは、

「みんなで沈黙で祈りましょう」

と言って沈黙で祈ろうと。また、

「静かに祈りましょう」

と静かに祈っても、どれでもいいですよ。ただ、新宿（注：1964～1965年、新宿婦選会館で伝道集会「マルコ伝」講筵を行う）みたいなところに行つたときにはやはり、パウロが言っているとおおり、

「いろいろあるんだから、人を躓かせないようにしようではないか」

と、パウロはロマ書でもコリント書簡でも言っている。そういうことはやはりわきまえてしなくてはいいかん。それで本当に人をなんとかして救いに持つていこうという、深い思い量りというもの、思い遣りということ。それはパウロ先生の素晴らしいところでありまして、また私たちの在り方というものの中にも含まれるところの大事なひとつの面である。



●驚くべき広大無辺な御霊

12 望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。13 貧しい聖徒を助け、
 努めて旅人をもてなしなさい。14 あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。
 祝福して、のろつてはならない。

「どきますよ」

と。パウロはみんなもう、きつきから申し上げているとおり、この御霊の力の世界に入ったら、この道理の奥に道理を動かすところの原動力を持っている。道理に対してこの動力を持っているから、道理に則つていく動力源がきているから、勧めるわけです。だから、

「迫害する者を祝福しなさい」

と。私は昔の古い友人のことや何かを時々思いますよ。どうしているだろうなと。こつちを「てんでしょうがないやつだ」と思っているかもしれないけれども。むしろ逆に、

「そうじゃないよ。どうか、本当の世界に入って喜んでいただきたい」

と。道で会えば、

「誰々さん、いかがでしょうか？」

とこちらから呼んでやる。なにか古い人が来ると、そっぽを向いてしまつたりしてはダメですよ。

どうか、皆さんは、どういう人であろうとも、この幕屋から出ていった人であろうと何であろうと、胸襟むねを開いて、こちらはどうにでも対せる。これが本当の大きさである。

「いかなる者にも雨を降らせ、陽を照らす。その主の全きが如く全かれ」

という「全き」というものは、これはキリストの霊が、御霊が、あの驚くべき広大無辺な御霊が、私たちの中に内住したもうときに、お互いさまこんな小さな群の中でゴタゴタなんかするようなことは、私はもう考えない。どうか皆さんも、

「そういうことは私は考えない」

ということになつていただきたい。

そこは、「今こそ人間尊重」という記事の中で、鈴木大拙さんが芭蕉の句を引用して言っています。また老子のことも題に出しておりますけれども、本当に「無為の為」ということ。

「達磨さんは絶学無為の人」

と書いてある。何もしないという。私はどうもとかく自分で先立つてやるものだから、皆さんにどうもかえって申し訳なかつたようであります。今度は、今年は何もしませんから。どうかひとつ、「無為」のあなた方が「為」の方になつていただきたい。何も老子然とする必要はないけれども。

「無為の為」という言葉を誤解してはいけません。

「いわゆる人間の作為的な為ではダメだ」

ということ。これは何も難しいことではない。福音的な角度が本当の無為なんです。



「我何ごとも為しあたわず」

なんだから。「為さず」というのはキリストなんだ。

「父が為せということをしている。自分は為さないと、為すんだよ」

と。「無為の為」というのは実はキリストが一番よくつかまえている。これはもちろん老子以上ですよ。

「我何ごとも為さず。しかし、神さまが為せと言うから、今日も明日も次の

日も為さざるを得ない。進み行かざるを得ない。働かざるを得ない」

という。「ざるを得ない」のは、自分の方は何も無いから。みんなこれは御霊の世界です。ただ悟りの世界ではない。その点でもすっかり律法を超越してまっついているわけです。福音の力の世界です。

● 本当の天的な道理

ヨーロッパの列強が勝手に世界をのつとつたから、そいつが逆に自分で今度は、権力意志で動いたやつらがお互いに喧嘩をしたのが、第一次戦争、第二次戦争ですよ。ちゃんと神の審判はきてますよ。そして、虐げられた人たちが今度は、独立の旗印をだんだん掲げてきて、今はそういう状態にある。中国はえらいことになるだろうと、トインビーがちょっと言ってますけれども。日本はこんなことをしていたら中国に負けますよ、実存の面でも。何も私は共産主義がいいなんて言っているんじゃない。とにかく、ある一つの結束でもって、あれだけ合理的に動いていますからね、向こうは。それは社会主義的なものと民主主義的なものとの一番――民社党ではないけれども――本当の中道というものは確かにあると思います。

中道を本当に力強く行くためには、ただ主義ではダメなんだ。その奥にこの本当の天的な道理を力として持っている人たちが動かなくては。いわゆる狂信的な宗教ではもちろんダメだ。社会のどういう層にどういうように働いていまして、そういう人が本当に目覚めて、そして本当の道理をはつきりと福音の角度から――ただ福音を説くのではない――ものが言えるということ。それぞれの専門の道においてこの福音の角度からはつきりとものが言え、またはつきりと仕事をしていく。そういうときに本当の力になる。これは10年や20年ではなかなかいきませんけれども。

これを何とかして進めていくために、私たちクリスチャンが大事な――無教会はある意味において、その政治的な面はかなり目を向けて――南原先生も矢内原先生もまたそういうところに確かに見識を持った方々です、この二人の総長は。内村先生が第一そうだった。藤井先生は政治のことには関係なさらなかったけれども、大きな視野を持っておられた。無教会はなかなか質がいいんです、正直。

けれども、こういった非常に有機体的な構造の自覚と、それから今度はその力です。



その本当の現実の力を持つこと。それは御霊の人たちがただ神癒みたいな、病を直すことばかりやっていたら、それはごく福音のある一面の働きにすぎないのであるけれども。

どうか、皆さんは、そういった御霊の世界は、もつとそれぞれの領域において本当の天的な文化を展開するところのためである。人間中の人間、「人間の尊重」というけれども、本当の人間の尊重は絶対にその角度からくるんだということを、身をもって証していく使命をおびている。

「私たちの福音はそんな狭くくるしい、あるいは何か狂信的な、そんなものじゃないぞ。観念でもないぞ」

と。パウロが持っていたところの素晴らしい構造とその力と、またヨハネが備えていたところのあの深い何とも言えないものを証していく。どうか、使徒たちがみな――ヤコブにしろ、ペテロにしろ、そうですが――それぞれの器をもつて証していったものをもう一遍、大きな自覚でもって読みなおし、そして、展開していただきたい。

その意味において、また預言書を読むことが大事です。旧約の預言の書。預言書だけではダメです。預言者の世界はまだキリストの光を本当に受けてませんから。けれども、このキリストの光でもって預言書を見ると、この気宇の大きさというものがまた出てきます。特に「イザヤ書」がそうです。また、人間ということにぶつかった、その深みと言いますか、潤いと言いますか、そういう豊かきになると今度は、「エレミヤ記」がなかなか大事です。エレミヤとイザヤと、もう一つ、この靈法の世界にくるといって、「エゼキエル」です。何といつても、やつぱりエレミヤ、イザヤ、エゼキエルのこの三人は不思議なものだよ、旧約では。ちょうど、パウロ、ヨハネ、ペテロみたいにね、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルというやつは。そういうのをよくじっくりと読んでいかななくては。

●キリストに賜りたる砕けの魂にこそ

15 喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。16 互いに思うことをひとつにし、

「思うことをひとつにし」

というのは、エペソ書3章の終りから4章にかけては正にこの「思うことをひとつにし」を最もよく語っているところなんです。この「一」ということ。そして、ヨハネ伝16章から17章のキリストの言葉。本当の一つ。

「思うところを、志をひとつにし、この福音のためには」という、この志を一つにし、そして、

高ぶった思いをいわず、

と、パウロはしきりにそう言っている。よほど、やはり昔も霊的傲慢がいたとみえますから、たかぶりはいかなんと言う。これはサタンの方ですから。



「サタンというやつは靈的傲慢者のチャンピオンなんだから、サタンになるなよ」というわけだ。

かえって低い者たちと交わるがよい。

よく学者なんていうのは、私たちの学問も多少そつちの方の世界だものだから、へたすると、学者的な何かちよつとたかぶりがある。それはいかんです、鼻についたようなのは。実は、小さい子どもを見ていても、小さい子どもの中に素晴らしい智慧が、また閃きが見える。そういうのを見ると、なんと大人はバカかと思う。

「子どもは大人の父である」

という、ワーズワースの言葉があるように。天真爛漫らんまんという。「天真」の真は、天の真でも天の心でもいい。天心、童心。何でも、真まことなるものに対して喜びを感じ、驚嘆を感じるような心です。

「いつも初心を持って」

というが、それも通じますね。成り上がった成心はいかんぞと。成ってしまったものはダメです、常に成りつつなければ。

だから、小成に安んずるなど。地上で成すことは大したことはない。せいぜい三日月くらいで、満月は向こうの彼方においてだ。しかし、満月に向かって、満月性まんげつせいを持っているから。満月性をいただいて、そして満月に向かって行く。これが恩寵の力によって進んで行くところのもの。しかし、それは自分のものではない。満月性というのはいただいたものなんだ。誇って、

「私の中に満月性がある」

なんて誇つたら、とんでもない。それでは真つ黒な満月になってしまうよ。

自分が知者だと思いがつてはならない。

と、はつきり言っているよ、パウロが。自分が学者、知者だと思いがつたら、とんでもない間違いだ。

「我何なにごとも知らず」

とソクラテスは言いました。

「何も分からないことが分かった、何もできないということが分かった」

と。パウロも、

「ああ、我悩める人なるかな」

と言った。

この中でも大拙おほせつさんが妙好人みょうこうにんのことを言っている。浅原才市あさいちという人が、

「どうか、私を悟つたような人間にしないでください。阿弥陀さんの救いが非常にありがたいのに、あまりこつちが悟つたら、もう有難みがなくなってしまうから」

なんて、そんなことを言っているところがありますけれども。



私たちは本当にそういった本当の砕けです。これは「痛み」ではない。「痛みの神学」なんてあるけれども。私は絶対に「砕け」です。神さまの側には、痛みはあるけれども、しかし痛みで救いは来ない。

神さまは、キリストにおいてのこの十字架の、イザヤ書53章の砕けでもって、私たちを本当に救いあげてください。我々自身の砕けの魂にこそ、キリストに賜りたる砕けの魂にこそ、その破れの中に霊は本当に住みたもう。自分が破れないで、御霊は来やしない。十字架で破れないで、御霊は来やしない。

しかし、あの「天路」や「終末の実存」の世界では、御霊の世界がまだ積極的には出ておりませんが、その前段階として大事なところが語ってあるわけです。あそこが無教會的限界なんです。私は自分で今読んで、それが分かる。無教會的限界だなと。

「素晴らしく展開しているんだが、無教會的限界がまだそこにあるな」

ということが自分で分かる。その先に行くとき度は、「桑の木によぢのぼる」の方がグッとその世界へ入ってしまふ。だから、表題は「桑の木によぢのぼる」にもちろんしたわけです。どんなにあとの「霊的神学的信仰告白」(「天路」「終末の実存」というのが重厚なものであっても――あれを自分で読んでいても、読みながら力がくるけれども――「桑の木」の方が単刀直入にその世界を展開しているわけです。

●和を以って貴しとなし

17 だれに対しても悪をもって悪に報いず、すべての人に対して善を図りなき
い。

「図れるよ」

と。パウロはもうひとつ先に進んで、そう言ってもらいたかったね、本当は。

「大丈夫、できるよ。そうしようじゃないか」

と。

18 あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。

一番先に「和」を言った人は誰ですか。聖徳太子である。聖徳太子の「十七条憲法」の第一条だよ。

「和を以もって貴とうとしとなし、忤さからうこと無むきを宗むねとせよ」

と。反逆はいかん、和らぎをもつて貴とうとしとせよと。おもしろい憲法だね。大和です。和は円に通ずる。円現と和とは一つになる。これは一人も例外なしに本当に和の世界です。誰か一人ぼつちなんかしたら、この集会はいけませんよ。全部、本当の和です。和らぎをもつて貴とうとしとなし、誰か人を審くことができるかという。聖徳太子は、とにかく仏教を入れた偉大な最初の先覚者です。その後、皇室にはキリストに対してそれだけの先覚のかたが出ていらつしやないようですね。あの聖徳太子があれだけ偉かったから、根を張



ったですね。確かにそれが言えると思います。和らぎ。神と人間の間の和を、和らぎの道を、これはパウロが言っているとおおり、

「己と和らがしめ」

とロマ書に書いてある。コロサイ書にも書いてある。その和は、

「幸いなるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん」

という。

「平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん」

と。平和を攪乱かくらんするものは、これはサタンの子です。平和をもたらす者は神の子である。その和をもたらすところの実質は何かというと、その人の中に本当の、言うまでもなく、愛とか歓喜とかいうのももって、

「あの人はなんと楽しそうな人だ。あの人はなんと温かい人だ」

と、温かみがある。笑いと人から流れていなければ、和は来ません。喜びというものは、温かみや笑いがある。笑いと人から流れていなければ、和は来ません。喜びというものは、温かみや

やっぱり、人間というものはお互いにくっついて、ほほえみ、笑いが出ないようだったらいかん。こないだ、だいたい昔の人にでつくわしたが、私の方からほどけていたんだけど、向こうは何かつんとしているんだ。気の毒だなと思った。そういう何か別な過去の判断で、人を判断している。

人がどうかではない。自分が喜ばす人、自分がそこに喜びを与える人、愛をそこに流す人、光をそこに投ずる人になる。これが本当の和の実質です。

「二緒にお互いに平和になりましょう」

なんて、いくら図つてみたつて、それは来やしない。自分がそうならなければ。自分が天国、自分が極楽になる。極楽のあるところに、天国のあるところに、そこに必ず和が生じます。和が生じなかつたら、そこには天国がない。極楽もない。こういうわけであります。

まあ、しかし、いろんな教会でも、いろんな団体でも、なんでもかんでもすぐ分裂、にらみあい、妬みあい、何かと色々な嫌な毒素がはたらきます。人間の世界はなかなか完全にはいかない。けれども、私たちはそのような破れ存在であろうとも、その奥からいつも破れを包んでしまうところのものは、その中心は結局、御霊のことになってしまふ。そして、このキリストを宿して、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

というものがすべての土台になる。

●愛は一切に勝つ

19 愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、

向こうがけしからんことをしたと言つて、自分で復讐をしてはいかん。



むしろ、神の怒りに任せなさい。

「神の怒り」というのは、「神の審判に任せなさい」ということ。

なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである。20むしろ、「もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである」。21悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。」

「塩がなくなったら、塩を送ってやれ」

というわけだ、上杉謙信の武田信玄に対するあの昔の武士というものは。

そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである。

これはユダヤの諺^{ことわざ}です。即ち、向こうが本当に自責の念に耐えなくなつて、「悪かった」と言つて、こちらの愛にかえつて救われる。

「愛は一切に勝つ」

というのがそのことです。損得ではない。損得の計算ではない。愛は一切に勝つ。相手が信じなくても、こっちは信じぬいていく。相手が疑つても、その人のために本当に祈っていく。聖霊の世界は、キリストの愛の貫きの世界はかくならざるを得ない。これは力味ではないですよ。この十字架の贖いというものはなんと根底的な力であるか。同時に聖霊であるかということですよ。

「絶対に十字架と聖霊は離せない」

ということを上記しているわけです。いわゆる「霊的」なんてことを言っているのではない。

他の宗教と違う点は、イエス・キリストの贖いということが絶対に根底であつて、その贖いの力、この贖いの法則がこの世界を救つていく。新天地というのはかくして来たらしめる。

キリストの体^{からだ}としての私たちの在り方というものは、全体は、世界は本当にキリストの体として、たくさんさんの痛みがある。不治の病がある。霊的な病がいろいろある。けれども、そのメタモルフォーゼ（変質変貌）を内的に起こさせるものは絶対に聖霊の愛の力、聖霊の愛の生命、聖霊の愛の光である。これを私たちが本当に身に体していけば、もはや行くとしてかなわざるはなしです。

「一切の秘訣を得たり」

とパウロが言うとおりであります。

もう、何も問題なしだ。私は本当に楽しい。私たちは1965年をこのような自覚とまた抱負と雄大な気宇と希望とをもつて進んでいこうと思う。決して小さな集会ではありません



せん、質的には。

いいですか。新聞を読みましても、いろいろ大事な問題をとりあげているが、しかし、その問題に対して、本当に私たちがその答案が書けるんです。これに対して有名人がいろんなことを言っているけれども、我々はその言説の奥の世界をちゃんと知っている。それを解決する、その壁を突破する正解を知っている。

福音というものは、皆さん、学問があるないにかかわらず、そのような本当の知性を、本当の智慧を、本当の力を、本当の現実を、本当の弾力性を、本当の大きさを、皆さん一人びとりに限りなく神さまは与え、そしてそれぞれの特徴を、あるひとつの絶対的な角度から伸ばしてください。そのように生きることが即ち身証することであり、そのように生きるものが即ち「霊の祭」である。

お釈迦さんのことを、こんなことを言っているのがある。

「かぐわ芳しきくれないはちす紅の蓮明日に咲きて香りいまだ去らず。見よ、仏陀の輝けるさまは中

空にかかる太陽に似たり」

と弟子が言った。あの仏陀ですら、太陽であると言われた。いわんや、イエス・キリストは本当の太陽です。

「宗教と文化」(「曠野の愛」第37号 1964年春季号)の後ろの方にも私は書きましたけれども、申し上げているとおり、日の丸の旗は私たち日本人の象徴である。一人びとりの象徴である。義にして愛なるところのこのキリストの御霊を、御霊なる主をうちに宿している。パウロが勧めているところのロマ書12章のこのすべては渾然としてそれがつかめていく。もし、これをバラバラに、何か倫理をパウロが説いて、この一つひとつを行っていくなんていったら、それは律法の世界でどうにもならん。これはパウロが何と言って展開しよう、グワーツと一つでもってこれをつかえまていく。そして、そういうズツと勧めるところものを――時々これを読んで、人間ですからいろいろです――それをやはり本当の勧めとし戒めとして、進んでいきたいというわけであります。では。

